

シノドスへの歩み みことばと共に 主の公現C年

小西広志

2022年1月2日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当の小西広志神父です。今日は2022年01月02日、主の公現の主日です。今日の朗読の箇所をシノドスの教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう。

光

第一朗読では「光」という表現が印象的です。「起きよ、光を放て」（1 節）で始まる今日の朗読箇所は、「あなたの上には主が輝き出で 主の栄光があなたの上に現れる」（2 節）とあります。輝く光は神の栄光の現れです。

人はその光のもとへと吸い寄せられていきます、引き寄せられていきます。ですから、4 節の「あなたのもとに来る」を味わいたいです。「来る」はヘブライ語の原文では「ポー」だそうです。4 節では「来る」、「進んで来る」、5 節では「集まる」、6 節では「携えて来る」と訳されます。

4 節で、敵によって遠いところに奪われていたシオンの息子や娘たちがやって来ます。5 節では国々の富がシオンに集められます。6 節ではメディアンやエファ、シェバに代表される異邦の人々がやって来ます。こうして、神の栄光に照されたシオンは、その光を照り返しながら、人々を集める「中心」となるのです。

啓示されました

第二朗読は『エフェソの教会への手紙』から読まれました。5 節にある「啓示されました」（5 節）を心に留めましょう。ギリシア語原文は「アポカリプター」ですが、元々の意味は「覆いを取って見せる、明らかにする」です。そこで、「隠されていたものを顕わにしていく」という意味が生まれます。そこから、「超自然の神秘、秘密を神が明らかにしてください」という意味へと展開していきます。『マタイによる福音書』では「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」（マタ 16 章 17 節）とイエスさまはおっしゃいます。ここでも「アポカリプター」が用いられています。そして、世の終わりでの特別な状況を表すためにも使われます。「人の子が現れる日にも、同じことが起きる」と『ルカによる福音書』には記されています（ルカ 17 章 30 節）。

今日の朗読にある「啓示されました」は、「今や霊において、かれの使徒たちや預言者たちに啓示された」と直訳できるそうです。そうしますと、秘められた神の計画であるキリストの救いの出来事は、他のだれでもな

い、キリストの使徒と預言者たちに明らかにされたのです。そして、時を経て、教会を通じてわたしたちキリスト者一人ひとりにも啓示され、つまびらかにされたのです。教会とはキリストの使徒であり、預言者なのです。

占星術の学者

福音朗読では1節にある「占星術の学者」について理解を深めましょう。フランシスコ会訳では「東方の博士たち」となっています。ギリシア語は「マーゴイ」ですが、占いや占星術、医術をおこなう学者たちを表す単語です。

東方の世界、つまり現在のイラン、イラクのあたりにいた彼らは星の運行から世界を見ようとする人々でした。イスラエルの民のように神のことばに頼らず、自然現象に頼る生き方をする人々でした。聖書が描く異邦世界の典型的な人物像と考えられるでしょう。教会の伝承に従えば、贈り物の数から学者たちは3人であったとするのが一般的です。メルキオール、バルタザール、カスパールという名前もつけられています。

「学者たちはその星を見て喜びにあふれた」(10節)とあります。ギリシア語から直訳すると「非常に大きな喜びを喜んだ」となるそうです。星の運行から世界を眺めるのも喜びだったでしょう。しかし、それは自分たちのこれまでの星についての理解の積み重ねから得られる喜びでした。また自然現象の中に何か神秘的なものがあることにも気がついて喜んだでしょう。しかし、それははかない人間がたまたま得たひとときの喜びでした。

学者たちは星を再び見つけて「非常に喜んだ」(フランシスコ会訳)のです。この喜びは神のことばと出会い、神のことばに信頼し、それに頼った末に得られた神さまからの喜びだったのです。

まとめ

第一朗読では神さまは光として描かれます。その光を照らし返すシオン、つまりエルサレムへと人々は引き寄せられていきます。第二朗読では、神さまの秘められた想いが、教会を通じて明らかにされていきます。福音朗読では、神のことばに頼った占星術の学者たちは、幼子イエスさまを捜しあてます。「光からの光」(ニケア・コンスタンチノーブル信条)であるイエスさまに引き寄せられたのです。もはや彼らは星に頼ることはしません。夢の中で語られた神のことばに頼るようになるのです。生き方が変わったのです。

話しは変わりますが、日本の社会で知識人と呼ばれる人々は、一神教を毛嫌いしているようです。一神教は厳しい宗教。多神教は自然の中で人間が共存していく宗教だと主張します。確かにうなずけるところもあります。しかし、わたしは一神教側の人間ですから、自然を尊ぶ宗教観こそ不安定であり、確からしさが無いように思えます。つまり、すべては自然と向き合う人間の心持ちしだいとするのが多神教による人間の姿だからです。アブラハムの父親であるテラがカルディアのウルを出発して遠いカナンの地を目指したのは、多神教的な不安定さから解放されるのを願ってのことだったのではないのでしょうか(創11章31節参照)。つまり、自然を尊び、そこに神を見いだしていくように見えて、その実、すべては人間の側の心の持ちよう、人間の側の問題に帰していく信仰態度に疑問を感じたからなのだと思います。

今日の福音朗読に登場する「占星術の学者たち」もまた、自然に頼り、星の運行に運命をまかせる生き方をしている人々でした。しかし、彼らは星の運行をつかさどる神の存在に気がついたのだと思います。それが遠いベツレヘムの馬小屋への旅へとなくなりました。

その際に、彼らが気がついたのは神のことばです。神のことばに耳を傾ける生き方にこそ、確からしさと喜

びがあることに気がついたのです。今年も神さまのことばに耳を傾け、神さまのみことばであるイエスさまと共に歩む一年を過ごしましょう。

それでは、また来週。